

保育者の運動遊び・幼児体育に関する研究

Research on exercise play and child physical education of kindergarten teachers.

笹谷絵里 ・ 荒木慎太郎 ・ 山本清文

保育者の運動遊び・幼児体育に関する研究

笹谷 絵里・荒木 慎太郎・山本 清文

1. はじめに

現在、幼児期の外遊びと小学生の運動習慣・体力の関連について、小学校入学前の外遊びの実施頻度が高いほど、小学生になった時の運動・スポーツ実施頻度の高い者の割合が多いことが指摘されている（スポーツ庁2019）。そのため、子どもたちは幼稚園・保育園そしてこども園などで、積極的に戸外での運動遊びを行うことを推奨されている（厚生労働省2018、文部科学省2018、内閣府・文部科学省・厚生労働省2018）。さらに、保育を実施する保育者自身が運動遊びや体を動かすことが楽しいと感じているかも子どもたちの運動経験を左右することが指摘されている（森他2004）。実際に保育者の運動遊び・幼児体育の能力の向上については、保育者が保育経験を積むことによって運動場面での援助や指導能力が向上することが明らかになっている（清他2018）。だが、幼児の運動に対する苦手意識の改善や運動遊びの指導については、個々の保育者の力量や家庭での経験に任されている面が多い（山下他2018、大木2017、工藤・江刺家2016）。また、保育者の運動経験が幼児の運動遊びの指導にどのような影響を与えるかについて、保育者を目指す学生を対象とした研究はなされているものの、（尾野2020、永井・石井2015、岩井2011）すでに子どもと接する立場にある保育者の運動経験に焦点をあてた研究は管見の限り見当たらない¹⁾。

そのため、本研究では保育者の小学校・中学校・高等学校および高等教育機関（専門学校、短期大学、大学）での運動経験が子どもへの指導にどのような影響を与えているのかを運動経験、器械運動の経験²⁾、体育経験から、現在の指導状況を明らかにすることで、今後、保育者に必要な運動遊び・幼児体育の指導における基礎的資料としたい。

2. 研究方法

本研究は、C法人に勤務する、保育者（幼稚園教諭・保育教諭・保育士）に対して、2020年7月～8月に「運動遊び・幼児体育」に関するアンケート」実施した。アンケートの内容は、①あなたは運動遊びが好きですか、②何か今までに運動経験（クラブ活動等）がありますか（やっていたことを記述してください）、③園児に運動遊び・幼児体育を指導する上で困難はありますか（困難の有無について具体的な記述を求めた）、④今まで運動遊びや幼児体育などの講習を受けたことはありますか、⑤あなたの器械運動の経験について教えてください、⑥あなたの体育の経験について教えてください、⑦運動遊び・幼児体育の指導について、⑧保育教諭として今後、運動・遊びについて、技術の取得、研修が必要だと思う研修項目について、⑨選んだ項目についてその理由を教えてください（具体的に記述してください）、⑩運動遊びについて感じていることを自由に記載してください、⑪今回のアンケートを通して思ったこと感じたことを自由に記載してくださいの11項目である。質問項目⑨、⑩、⑪については自由記述とした。アンケートの回答者は合計76名である。

3. 倫理的配慮

本調査の実施に当っては研究対象者に文書にて研究の趣旨、目的、研究結果の利用方法、個人情報管理、研究協力を拒否する権利について説明を実施した。本研究は花園大学研究倫理委員会の承認を受けている（承認番号：2020-09）。

4. 結果と考察

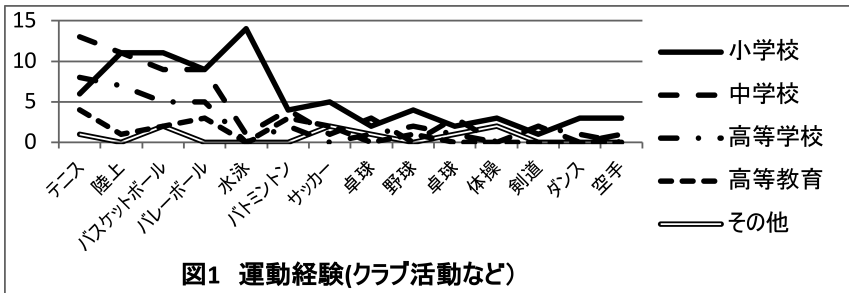
回答者の基本属性としては、男性3名（4%）、女性68名（89%）、未回答5名（7%）であった。年代は、20代が27名（36%）、30代が29名（39%）、40代が7名（9%）、50代が4名（5%）、未回答9名（12%）であり、回答者の75%を20代と30代が占めた。学歴は、専門学校卒が13名（17%）、短期大学卒が38名（50%）、大学卒が17名（22%）、未回答が8名（11%）で短期大学卒業者が回答者の半数を占めた。職歴は、3年未満が5名（7%）、3年以上5年未満が8名

(11%)、5年以上10年未満が22名(29%)、10年以上が33名(43%)、未回答が8名(11%)で、5年以上の保育経験を持つ、中堅やベテランとされる保育者の回答が約7割を占めた。

アンケート項目を①から順にみてみると、

①あなたは運動遊びが好きですかでは、「はい」が62名(82%)、「いいえ」が10名(13%)、「いずれでもない」(未回答含む)が4名(5%)で、80%以上が運動遊びは好きであると回答した。

②何か今までに運動経験(クラブ活動等)がありますか(やっていたことを記述してください)では、小学校、中学校、高等学校、高等教育(専門学校・短期大学・大学)その他について尋ねた。結果、ボール運動や水泳運動、陸上運動を中心にさまざまな運動経験があることがわかった(図1)。



③園児に運動遊び・幼児体育を指導する上で困難はありますかでは、「はい」が61名(80%)、「いいえ」が8名(11%)、未回答が7名(9%)であった。具体的な内容としては、「苦手意識の強い子」や「運動が苦手な子への指導」といった子ども自身が運動やからだを動かすことに苦手意識を持っている場合の困難と「自分が苦手なので」といった自分自身が運動を苦手と感じているため、指導が難しいとの意見に大別できた。他にも子どもに合わせた指導が難しいとして、「一人一人のお子様に合わせた指導が難しい」といった子どもの個性や能力に合わせた指導方法の難しさや「どこまで補助すればいいのか」といった指導技術についての困難が述べられた。また、運動遊びは好きだが、自分自身は運動や体育を苦手

と感じ、指導が難しいと感じていることも少なくなかった。

④今まで運動遊びや幼児体育などの講習を受けたことはありますかでは、受けたことがあるが47名（62%）、受けたことがないが28名（37%）、未回答1名（1%）であった。この結果から、質問①で多くが運動遊びを好きと回答しており、実際に60%以上が運動遊びや幼児体育などの講習を受けていたが、回答者の80%が園児に運動遊び・幼児体育を指導する上で困難があると考えていることがわかった。

⑤あなたの器械運動の経験について教えてくださいとして、小学校、中学校、高等学校、高等教育機関での器械運動の経験種目について尋ねた。小学校での器械運動の経験種目をみると、マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動が71名（93%）、マット運動・跳び箱運動が3名（4%）、鉄棒運動・跳び箱運動が1名（1%）であり、マット運動のみ、鉄棒運動のみ、跳び箱運動のみ、マット運動・鉄棒運動、鉄棒・跳び箱が0名（0%）であり、行っていないは0名（0%）、未回答が1名（1%）であった。結果としてほとんどの回答者がマット運動・鉄棒運動・跳び箱運動を小学校で経験していた（図2）。

次に、中学校での器械運動の経験種目をみると、マット運動・跳び箱運動が27名（36%）、マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動が26名（34%）、マット運動のみが9名（13%）マット運動・鉄棒運動が2名（3%）跳び箱運動のみと鉄棒運動・跳び箱運動が各1名（1%）、鉄棒運動のみが0名（0%）で行っていないが6名（8%）、未回答が4名（5%）であった。中学校の器械運動では、鉄棒運動を実施する割合が減少していた（図3）。

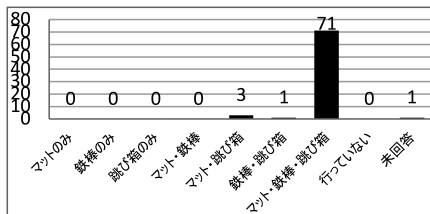


図2 小学校で行った器械運動の種目

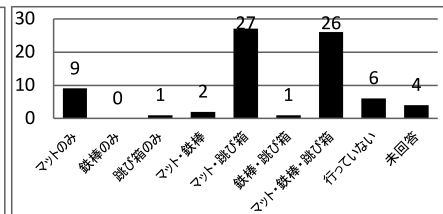
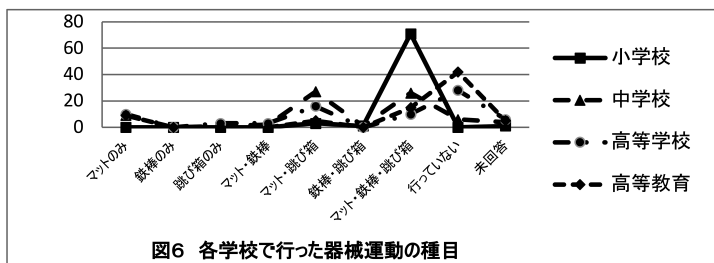
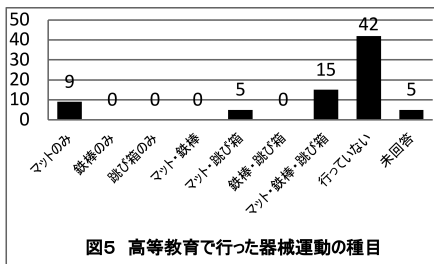
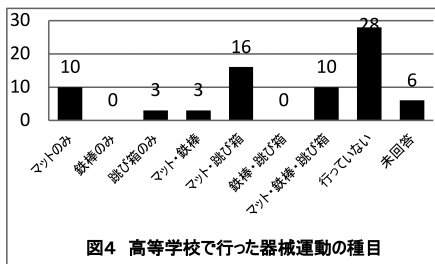


図3 中学校で行った器械運動の種目

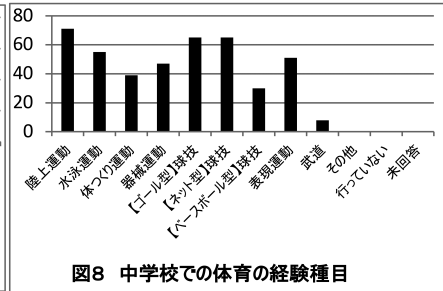
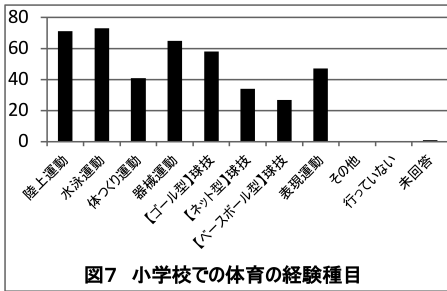
高等学校での器械運動の経験種目をみると、器械運動について行っていないが28名(37%)と最も多く、マット運動・跳び箱運動が16名(21%)、マット運動のみとマット運動・鉄棒運動・跳び箱運動が各10名(13%)、跳び箱運動のみとマット運動・跳び箱運動が各3名(4%)、鉄棒運動のみ、跳び箱運動・鉄棒運動が各0名(0%)であり、器械運動を経験していない割合も小学校・中学校よりは増加していたが、半数以上が何かの器械運動を経験していた(図4)。

高等教育機関での器械運動の経験種目をみると、器械運動について行っていないが42名(55%)と最も多く半数以上が器械運動を経験していなかった。一方で、マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動の経験は15名(20%)であり、高等学校での器械運動の経験種目より増加していた。他には、マット運動のみが9名(12%)、マット運動・跳び箱運動が5名(7%)、鉄棒運動のみ、跳び箱運動のみ、マット運動・鉄棒運動、鉄棒運動・跳び箱運動が各0名(0%)と続いた。未回答は5名(7%)であった。回答者の多くは、保育系の高等教育機関を卒業しているため、幼児を指導するという視点から高等学校よりも器械運動の経験種目を多く実施する機会が増加していたと考えられる。一方で、器械運動を高等教育機関で行っていないと回答した回答者も半数を占め、高等教育機関での指導内容に差があることがわかった。小学校から高等教育機関までの器械運動の経験を見ると小学校でかなり高い割合で器械運動を経験していた。だが、中学校・高等学校・高等教育機関と進むにつれて器械運動を経験する機会が減少していることが明らかになった。だが、高等教育機関では半数以上が器械運動を経験していない反面、20%がマット運動・鉄棒運動・跳び箱運動を経験しており、高等学校での経験種目より幅広く学んでいる割合が高まった。これは、幼児教育という保育者を養成する高等教育機関の卒業生が多数を占めることが影響しているかについて今後、検証する必要がある(図5、図6)。



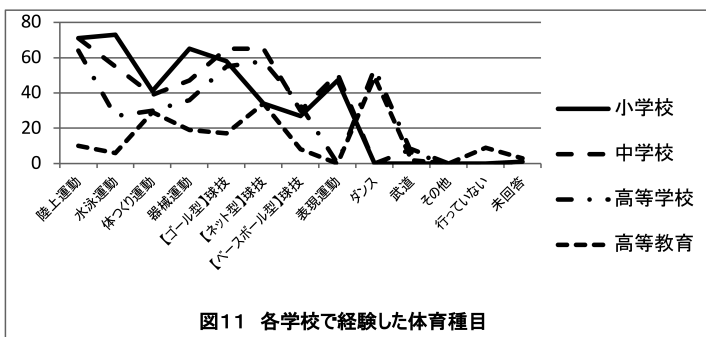
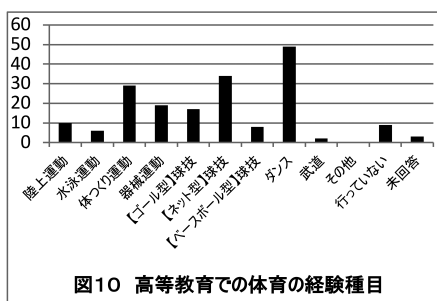
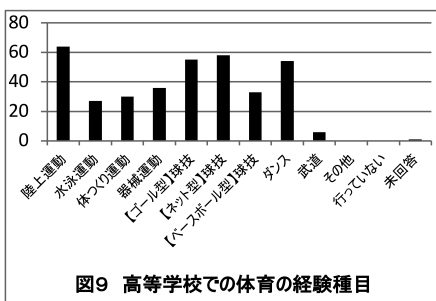
⑥あなたの体育の経験について教えてくださいとして、小学校、中学校、高等学校、高等教育機関での体育の経験種目について尋ねた。小学校での体育の経験種目をみると、水泳運動73名（96%）、陸上運動71名（93%）、器械運動41名（86%）、ボール運動【ゴール型】58名（76%）、表現運動47名（62%）、体づくり運動41名（54%）、ボール運動【ネット型】34名（45%）、ボール運動【ベースボール型】27名（36%）、その他、行っていないは0名（0%）であった。未回答は1名（1%）であった。回答者のほとんどが、小学校において陸上運動や水泳運動を経験していた（図7）。

中学校での体育の経験種目をみると、陸上運動71名（93%）、ボール運動【ゴール型】65名（86%）、ボール運動【ネット型】65名（86%）、水泳運動55名（72%）、表現運動51名（67%）、器械運動47名（62%）、体づくり運動37名（48%）、ボール運動【ベースボール型】30名（39%）、武道8名（11%）、その他、行っていないは0名（0%）であった。未回答は0名（0%）であった。小学校よりも水泳運動の割合が減少し、ボール運動の割合が増加していた（図8）。



高等学校での体育の経験種目をみると、陸上運動64名（84%）、ボール運動【ネット型】58名（76%）、ボール運動【ゴール型】55名（72%）、ダンス54名（71%）、器械運動36名（47%）、ボール運動【ベースボール型】33名（43%）、体づくり運動30名（39%）、水泳運動27名（36%）、武道6名（8%）、その他、行っていないは0名（0%）であった。未回答は1名（1%）であった。水泳運動の経験がさらに減少し、ダンスの経験については中学校時よりもやや増加していた（図9）。高等教育機関での体育の経験種目をみると、ダンス49名（64%）、ボール運動【ネット型】34名（45%）、体づくり運動29名（38%）、器械運動19名（25%）、ボール運動【ゴール型】17名（22%）、陸上運動10名（13%）、ボール運動【ベースボール型】8名（11%）、水泳運動6名（8%）、武道2名（3%）、行っていないは9名（12%）、その他は0名（0%）であった。未回答は3名（4%）であった。高等教育機関では、全体として体育の経験種目の割合が減少していた。そのなかで、一番経験種目としての割合が高かったのはダンスで約6割がダンスを経験していた。また、高等教育機関でまったく体育を経験していない回答者も約1割いることが分かった（図10）。小学校から高等教育機関までの体育の経験種目を見ると、小学校・中学校ではさまざまな体育種目を経験していることが分かった。特に小学校では、陸上運動と水泳運動についてはほとんどが経験していた。水泳運動については、中学校での経験割合が減少していたが、ボール運動については小学校よりも経験割合が増加していた。高等学校では、全体として、経験割合が減少していたが、小学校・中学校と並んで陸上運動については高い割合となっていた。また、表現運動に変わりダンスが体育種目に入り、

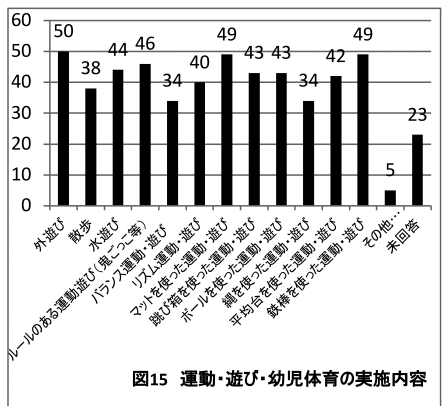
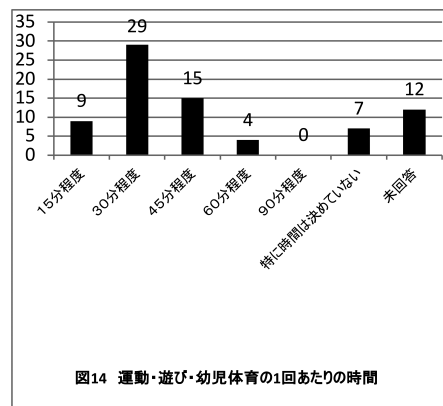
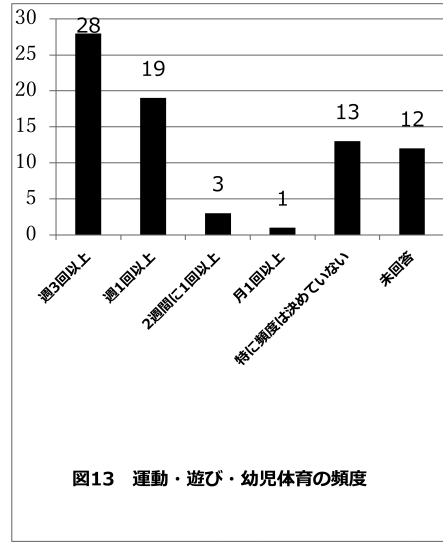
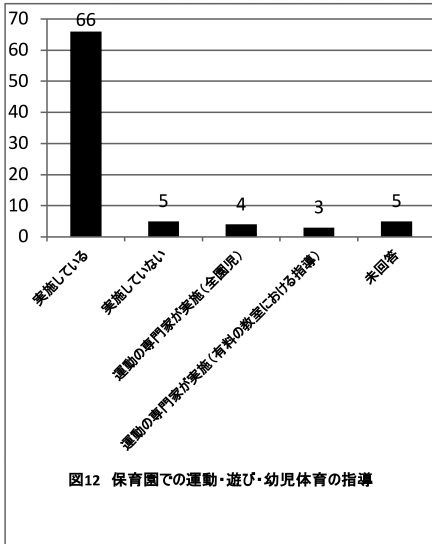
表現運動よりも経験の割合が増加していた。高等教育では、高等学校よりもさらに経験割合が減少し、小学校ではほとんどが経験していた水泳は8%のみ経験割合となった。一方で、高等学校に続き、ダンスは約6割が経験しており、高等教育機関での経験割合が最も高かった。また、体育を行っていないも12%含まれた。さらに、前述の器械運動の経験と体育の経験の中での器械運動の回答数が一致しない理由として、器械運動と体づくり運動など他の運動と内容を混合している可能性が考えられる（図11）。



⑦運動遊び・幼児体育の指導について、園での運動・遊び指導、実施している場合はその頻度と1回の実施時間及びその内容について尋ねた。園での保育において、運動・遊びを指導していますかでは、実施しているが66名（87%）、実施していないが5名（7%）、運動の専門家が実施（全園児）4名（5%）、運動の専

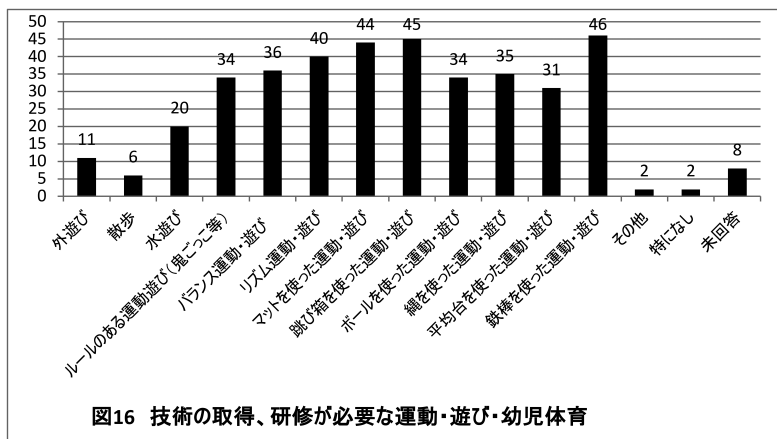
門家が実施（有料の教室における指導）3名（4%）であり、未回答は5名（7%）であった。（図12）。さらに、実施していると回答した回答者に対して、「実施している」と回答された方にお聞きします。運動・遊び・幼児体育は、どのくらいの頻度で実施されていますかでは、週3回以上が28名（37%）、週に1回以上が19名（25%）、特に頻度は決めていないが13名（17%）、2週間に1回以上が3名（4%）、月に1回以上が1名（1%）で未回答が12名（16%）であった（図13）。運動・遊び・幼児体育は、1回につきどれくらいの時間行いますかでは、30分程度が29名（38%）、45分程度が15名（20%）、15分程度が9名（12%）、特に時間は決めていないが7名（9%）、60分程度が4名（5%）、90分程度が0名（0%）で、未回答は12名（16%）であった（図14）。

運動遊び・幼児体育の実施内容については、外遊び50名（66%）、マットを使った運動・遊び49名（64%）、ルールのある運動・遊び（鬼ごっこ等）46名（61%）、水遊び44名（58%）、跳び箱を使った運動・遊び、ボールを使った運動・遊びが各43名（57%）、平均台を使った運動・遊び42名（55%）、散歩38名（50%）、バランス運動・遊び、縄を使った運動・遊び34名（45%）その他5名（7%）で未回答23名（30%）であった（図15）。結果から、回答した保育者の多くが運動遊び・幼児体育を指導していることがわかった。頻度としては、週1回以上・週3回以上が約6割を占めていた。実施時間は30分程度・45分程度が約6割を占め、幼児の集中力が持続する時間内で実施されていることが分かった。実施内容に目を向けると、幅広い内容で運動遊びや幼児体育が実施されており、幼児の発達を考慮したバランスの良い内容となっていることが分かった。



⑧保育教諭として今後、運動・遊びについて、技術の取得、研修が必要だと思う項目について質問した。最も多かったのは、鉄棒を使った運動・遊びで46名(61%)、跳び箱を使った運動・遊び45名(59%)、マットを使った運動・遊び44名(58%)、リズム運動・遊び40名(50%)、バランス運動・遊び36名(47%)、縄を使った運動・遊び35名(46%)、ルールのある運動・遊び(鬼ごっこ等)、ボールを使った運動・遊びが各34名(45%)平均台を使った運動・遊び31名

(41%)、水遊び20名 (26%)、外遊び11名 (14%)、散歩6名 (8%)、その他、特になしが各2名 (3%) で、未回答が8名であった (図16)。さらに、
 ⑨問い⑧の研修項目を選んだ理由を教えてください。なしの方はその理由を教えてください (具体的に記述してください) と選定理由について尋ねた。具体的な記述として、「指導内容がパターン化してしまっているため、遊びの幅やレパートリーを広げたい」や「正しい指導方法・技術や知識について知りたい」という「レパートリーの増加や幅を広げる」という意見と「正しい技術や知識の取得」についての意見が多くみられた。他にも、幼児期に体幹を鍛えることが重要である、子どもの発達を理解するとともに、発達に合わせた指導をしていくことが大切との意見が述べられた。他にも子どもに楽しんでもらえるようになりたい、正しい技術を指導することがケガや事故の防止になるため、自分自身が運動が苦手であるためとの意見があった。



⑩運動遊びについて感じていることを自由に記載してくださいでは、「運動遊びがいつもそこにある環境がつかれること」や「運動遊びについて自分自身が経験・体験したことに限られてしまうのでいろいろな情報を得ながら実施したい」、「運動遊びを通じた子どもの成長が楽しい」、「乳児期からの積み重ねの大切さ」、「心身の健康のために必要」、「プロの体育指導者に指導してもらおう事の重要性」、

「子どもたちと接していて、子どもたちが運動や遊びが好きだと感じる」といった意見や「交流や試合などの機会」や「他園の状況を知りたい」といった記述があった。(記述内容)

最後に、①今回のアンケートを通して思ったこと感じたことを自由に記載してくださいとした。ここでは、「自分自身の運動経験や体育経験を思い出す良い機会になった」や「普段何気なく行なっている活動がさまざまな運動につながっていることを実感した」「子どもたちに体を動かす楽しさや体づくりの基礎を伝えたい」、「自分の苦手な部分が認識できた」、「過去のことをほとんど覚えていなかった」「今後運動遊びや幼児体育の研修があれば参加したい」「乳幼児期の運動遊びの大切さがわかった」「学校教育の中で運動する機会が減少していくことがわかった」といったさまざまな感想が述べられた。

5. まとめ

本研究では保育者の小学校・中学校・高等学校および高等教育機関（専門学校、短期大学、大学）での運動経験が子どもへの指導にどのような影響を与えているのかを運動経験、器械運動の経験、体育経験から現在の指導状況を明らかにした。結果、多くが運動遊びを好きと回答していたが回答者の80%が園児に運動遊び・幼児体育を指導する上で困難があると考えていた。

さらに、多様な運動が経験されていた。小学校から高等教育機関までの器械運動の経験では、小学校でかなり高い割合で器械運動を経験していたが、中学校・高等学校・高等教育機関と進むにつれて器械運動を経験する機会が減少していることが明らかになった。だが、高等教育機関では半数以上が器械運動を経験していない反面、20%がマット運動・鉄棒運動・跳び箱運動を経験しており、高等学校での経験種目より幅広く学んでいる割合が高まっていた。

次に小学校から高等教育機関までの体育の経験種目を見ると、小学校・中学校ではさまざまな体育種目を経験していることが分かった。特に小学校では、陸上運動と水泳運動についてはほとんどが経験していた。中学校では、ボール運動については小学校よりも経験割合が増加していた。高等学校では全体として、経験

割合が減少していたが、小学校・中学校と並んで陸上運動については高い割合となっていた。また、ダンスの割合が増加していた。高等教育では、高等学校よりもさらに経験割合が減少していたが、ダンスは高等教育機関での経験割合が最も高かった。また、体育を行っていないも12%存在した。

運動や遊びの指導の状況を見ると、回答した保育者の多くが運動遊び・幼児体育を指導していることがわかった。頻度としては、週1回以上・週3回以上が約6割を占めていた。実施時間は30分程度・45分程度が約6割であり、幼児の集中力が持続する時間内で実施されていることが分かった。今後必要な研修や技術については、多方面の研修や技術の取得が望まれたが、器械運動に関する研修や技術の取得が最も多く希望された。その理由として、「レパトリーの増加や幅を広げる」という意見と「正しい技術や知識の取得」についての意見が多くみられた。今後これらの研究結果やさらに、調査研究を継続し、今後の研修の実施や指導方法の確立につなげたい。

補注

- 1) 保健体育の教員を目指す学生の運動経験についての調査も存在するが、(山本・菅2020, 小倉・長谷川2018) 教員を対象としたものは管見の限りなかった。
- 2) 器械運動を選定した理由として、器械運動の指導に関しては教員自身が指導に対して特に苦手意識を持っていることや指導が難しいと感じていることが明らかにされているためである(小島2020・長谷川2019・清水他2019)。

謝辞

研究にご協力いただきました、C法人の先生方に感謝申し上げます。

引用文献

- 長谷川 晃一・平田 佳弘・黒川 隆志(2019)「学校体育現場における器械運動の実施状況に関する研究 ― 小中高校教員へのアンケート実施を通して ―」『環太平洋大学研究紀要』14: 57-72
- 岩井 幸博(2011)「保育者養成課程における女子学生の運動経験に関する調査: 幼児期から青年期に至るまでの運動経験」『研究紀要』2: 65-76

- 清葉子他（2018）『幼児クラスにおける保育者の運動場面での援助・指導の傾向—保育者へのアンケート調査の分析から—』 椋山女学園大学教育学部紀要11, 59-68
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説 平成30年3月』 フレーベル館
- 工藤ゆかり・江刺家由子（2016）『幼児期の遊びの必要性—毎日、楽しく体を動かすためには—』 帯広大谷短期大学紀要53,27-36
- 小島正憲（2020）「中学校保健体育科教員を対象にした器械運動の意識調査—マット運動について—」『東邦学誌』 49（1）：20-28
- 森司朗他（2004）『園環境が幼児の運動能力発達に与える影響』 体育の科学54（4）329-336
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成30年3月』 フレーベル館
- 永井 夕起子・石井 天真（2015）「運動経験が保育者の資質にもたらす影響について：パイロットスタディ」『湊川短期大学紀要』51：73-75
- 小倉 晃布・長谷川晃一（2018）「保健体育教員志望学生の幼児期・児童期の運動経験に関する一考察：「器械運動」受講学生へのアンケート調査から」『環太平洋大学研究紀要』13：1-7
- 尾野 明美（2020）「保育者を志望する学生の運動経験が幼児の身体活動の指導に及ぼす影響：責任実習の内容による分析から」『小田原短期大学研究紀要』50：59-65
- 大木みどり（2018）『幼児期の運動遊びの実態と課題—保育者が指導・援助する上での課題—』 羽陽学園短期大学紀要10（4）：27-47
- 清水清志他（2019）「小学校教諭の器械運動指導に関する意識について～群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から～」『群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター』36：107-116
- スポーツ庁（2019）『平成30年度 体力・運動能力調査報告書 令和元年10月』 スポーツ庁 (https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1421920.htm20200612取得)
- 山本清文・菅正樹（2020）「大学体育授業における器械運動に関する研究」『花園大学文学部研究紀要』52：395-406
- 山下晋他（2018）『意欲的に体を動かして遊ぶ子どもの育成を目指して—園内研修と家庭との連携を意識した運動遊びの実践を通して—』 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究4, 121-129